

あこがれの リーズ ピアノコンクール

中井鈴子

ユニバーシティグレートホール入口

リーズという街

リーズは、ロンドンのキングスクロス駅から北に2時間半程汽車に乗ったヨークシャー州の中心に位する産業都市である。この街でピアノ・コンクールが創設されたのは1963年で、その後3年毎に行われており、本年は第10回目に当り、9月7日から22日まで行われた。過去の優勝者には、ラドゥ・ルプー、マーレイ・ベライアをは

じめ日本人では内田光子、寺田悦子、昨年は小川典子さんが受賞されている。

ここに“あこがれの”と書かざるを得なかったのは、前々からロンドン来訪を兼ねてリーズ・コンクールには是非行きたかった。加えて多少語学が通ずる期待もあったのかも知れない。しかし前回の1987年にはエリザベト・コンクールに出掛けて機会を逸し、次の1990年まで、即ち本年まで、3年間を待ちこがれていたからである。

ミセス・ローガンについて

私は一人旅を志すので、まず最初に直面したのは、このコンクールの実体を把握することであった。特に本年は、ショパン、チャイコフスキーなど名だたるコンクールが目白押しに開催され、どの音楽機関も旅行会社も、リーズ・コンクールに関する情報は皆無であった。結局家人が、直接リーズ市役所、リーズ大学等との電話により、やっとコンクール事務局の中心人物、ミセス・ローガンに連絡できたのである。その後ファックスのおかげで、ミセス・ローガンから、より詳細なスケジュール、課題曲、さらには通し切符の入手も可能となったのである。

このミセス・ローガンは、現地で早速お会いしてみると、中年の美しい方でご親切に応待して下さい、審査発表後のレセプションの招待状も頂き大へん恐縮した。彼女はリーズ・コンクール創始者の片腕的存在でいられることも後で知った。

また私は国際コンクールを聞いた今までの経験から、今回は第一次予選を聞きたかったので、9月7日から始まるSTAGE ONEの最終の9月11日の午後の部に滑りこんだ。

テープと書類審査		全参加者 185名 (日本人は全員落選)				
審査	参加者	月 日	時 間			場 所
STAGE ONE	77名	9月7日	9:30am	2:00pm	7:15pm	リーズ・ユニバーシティ グレート・ホール
		8	〃	〃	〃	
		9	〃	〃	〃	
		10	〃	〃	〃	
		11	〃	〃	〃	
STAGE TWO	25	13	〃	〃	〃	〃 グレート・ホール
		14	〃	〃	〃	
		15	〃	〃	—	
SEMI FINAL STAGE	12	9月17日		2:00	7:00	リーズ タウン・ホール
		18		〃	〃	
		19		〃	〃	
FINAL STAGE (WITH ORCHESTRA)	6	9月21日			6:45	〃 タウン・ホール
		22			〃	
RECEPTION		9月22日			11:00	クィーンズ・ホテル

(注) テープ及び書類審査で日本人全員が落ちたのは、本年の数多い他のコンクールに優秀者が散ったという説もある。

STAGE ONE

いわゆる STAGE ONE はバロック、クラシックの課題が殆どで、一人1時間近い演奏である。グレート・ホールに駆けこんだ最初は、スペインのイトゥアルテであった。彼はベートーベン作品101、ラヴェルの“鏡”から一曲、シューマンのトッカータであったが、何かストレスの多い感を受けた。しかし、私はここでやっとリーズ・コンクールの客席に落ちつき、新たな喜びに浸ったのである。

二番目はチリーのペルルはソナタ“告别”であったが、その最初の和音から忽ち緊張の一瞬を感じ取った。大へん多彩な音楽性の魅力に強くひかれたが、思いがけないミスも多かった。後で聞けば、この人はブゾーニ・コンクール第3位、ウィーンのベートーベン・コンクールでも評判高く、なかなかファンの多いナイス・ガイであった。

次のフランスのルサージュは綿密に曲が仕上がっており、一点のミスもなく曲の盛り上げ方が華麗であり、特にベートーベン作品110のフーガは素晴らしかった。あと2人を聞き終えて、第一次予選はかい間見た程度であったが、非常に聞き応えがあり今後が期待された。早速十数人の審査員の中の紅二点のお一人、中村絃子さんにお話しする機会があったが、彼女も大へんレベルが高い、とおっしゃっておられた。

ユニバーシティ・グレート・ホールについて

ここで STAGE ONE, TWO, いわゆる予選の会場となったリーズ・ユニバーシティ、グレート・ホールについて述べたい。この大学はリーズ駅から歩いて25分程の郊外にあった。19世紀前半、産業革命とともにできたリーズという都市に、このような古く壮大なユニバーシティがあるのは意外であった。広々としたキャンパスの中に、2、3階の建物が、それぞれの建築様式を誇って点在し、緑も多く花壇の花が咲き乱れていた。しかしこのグレート・ホールはまさに大学の講堂であり、窓のステンドグラスも質素で、ウィーンのブラームス・ザールの絢爛たる装飾とは打って変わったシンプルなものであり、ピアノの響きはピティナの朝日生命ホールの響きそのもので、STAGE ONE, TWO は学期末の大学のテスト風景であった。私共一般聴衆の前三列が審査員席であったが、皆楽譜を拡げたり、長時間にかかわらず、その真剣な態度に感銘を受けた。

STAGE TWO

STAGE TWO の演奏者は77人から25人となった。三日間大方聴いたことになるが、STAGE ONE に対して

今度はロマン派の入ったプログラムであり、少し演奏に気のゆるみを感じさせる節もあった。しかし名演奏はあった。

ブルガリアのディミトローバ演奏のバッハのパーティータ4番、これ程バッハもうたえるものかと驚き、その舞曲特有の表現力、美しい音に魅せられたこと。ポルトガルのピサロの説得力のあるブラームスの8つの小品。韓国のバイクの明確な音、エネルギー感ある演奏。バロックの体質を感じたハンガリーのスツォコレイ。音のよくなるスター性のあるカナダのミン。ピアノの虫とも言うべき豊かな音色を持つフランスのルサージュのシューマン等々、まさにロマン派花咲く演奏が続いた。

また、今回は不思議にリストのロ短調ソナタが何度となく演奏され、終り頃はこの曲の最初の2音が響くと、どっと疲れがあふれ出る現象を体験し、またショパンのソナタNo.3も、もう結構という程多く演奏された。

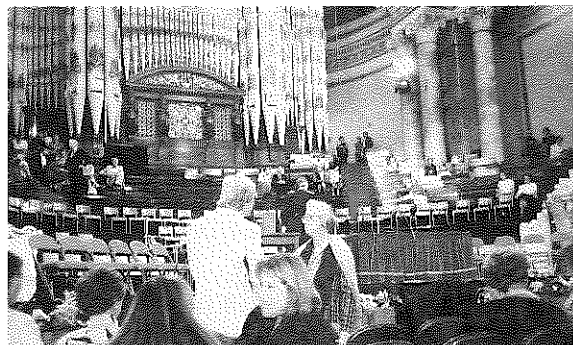
何といっても一日9時間の演奏を聞くについては、演奏者には申訳ないが、うまい演奏が続くと、聞いている方も嬉しい緊張感で疲れ、少し演奏がだれると、聴衆にとっては唯一の休息であるというリズムも教えられた。

また演奏者それぞれのタッチの美しさは、結局本人が見つけ出さなければ、誰も助けられないものだ、としみじみ痛感したのもその一端であった。

華やかになった SEMI FINAL STAGE

SEMI FINALに残ったのは12名であった。会場もシティのリーズ・タウンホールに移った。これまでのうす暗い地味な講堂と違い、大きなホールであり、原始的ともいえる臨時の二つの強い電光の中で演奏された。このステージよりテレビ中継されると聞いた。まさに檜舞台そのものであった。

実力者はますますそれを乗り切る態勢にあり、弱者は体力的にも、精神的にも、その弱さを哀れにも露呈する感があった。このステージでは現代曲を一曲必ず入れなければならない。



Semi Finalの休憩



Stage One
審査員の中村絃子さんと
中井先生、ロイヤルアカデミーの
西田淳子さんとお友達

ますますスター的存在を 確保するピサロ

ここで私がすっかり心のとりことなったポルトガルのピサロ (ARTUR PIZARRO - 22才) について述べたい。

ピサロは将にショパンコンクールにおけるブーニンの存在であった。ブーニンも音楽家系であったが、ピサロも当コンクールの審査員ポルトガルのホセ・セクラコスタの養子と聞いた。ブーニンの病的な程の繊細なイメージと反対に、背高くサッカー選手のような好青年である。

まずこのステージではドビュッシーの“子供の領分”から始まり、そのゆったりした美しい音に吸いこまれた。

ラフマニノフのソナタ2番では、常に自身が自分の音楽を観察し、指揮し、指示しているかのようであり、第2楽章の作曲者特有の和音の美しさは遺憾なく発揮され、第3楽章では体中から情熱がほとばしるのを見た。

次にショパンのエチュード Op. 25 全曲では、彼は常人と思えない程、玩具のように自然体でピアノを扱った。

No.1は、いろいろな弾き方があるが、彼の場合は音を

多様に組み立てた多彩な演奏であり驚いた。

No.2は、ただ鍵盤を押しているかのように繊細に流れ、バスがうたった。

No.3は、まさに遊びであった。

No.4は、決してあわず、大切な音も非常に丁寧に、私たちを納得させた。

No.5は、曲の移り変りが絶妙だった。

No.6は、3度は疾風の如き速度で正確であり、私は大へん幸福感に酔った。続いて、

No.7は、手首で鍵盤をなでているかのように、その流麗さに酔った。

No.8は、リラックスの中で風の如く駆け抜けた。

No.9は、ピアノとさらに一体となり、

No.10は、Mollの無気味さをオクターブが遺憾なく発揮し、中間部の唄は申し分なく幸福感を現し、またMollに流れた。

No.11の木枯しは、細い動きを背景にメロディーの付点があのような正確さで、リラックスして流れたのは聞いたことがない。そこでゆとり充分に、すかさず続いて終曲への入り方も素晴らしく圧巻だった。

それに彼はピアノをマシンを扱っているかのように、ペダルの扱いが実にうまく、その効力を遺憾なく駆使したのである。まだ幾日でも弾き続けられる余力を感じた。

彼の体中の血液は音楽で充されているかのようにであった。まだ22才でありどのように成長するか、今後を見つめたいものである。

フランスのエリック・ルサーージュも絶妙であったが、何か一つスター性に欠ける感があったことは否めない。

すばらしいシンフォニーと 共に開かれた FINAL STAGE

6名が残った。タウンホールも各国の国旗が飾られ、わが国の日の丸も一番裾で力なく下っていた。やはり物悲しい感がある。プログラムは次のピアノ・コンチェルトである。

シューマンのピアノ・コンチェルトが4人も重なった

演奏 順序	演奏者	国籍	年齢	曲目	入賞 順位
1	HAESUN PAIK	韓国	25	シューマン イ短調	5位
2	ANDREI ZHELTONOG	ソビエト	18	ベートベン No.1	6位
3	LARS VOGT	西独	19	シューマン イ短調	2位
4	BALAZS SZOKOLAY	ハンガリー	29	〃	4位
5	ERIC LE SAGE	フランス	25	〃	3位
6	ARTUR PIZARRO	ポルトガル	22	ラフマニノフ No.3	1位

が、この曲はむしろオーケストラの見せ場が多く、注目のサイモン・ラトル指揮バーミンガム・オーケストラの実力は充分知り得ることができた。

シューマンのコンチェルトで一番好もしかったのは、韓国のバイクで、その第一声でロマンチックの香りが、強烈に醸し出された。

ソビエトのツェルトノクも若さ一ぱい発揮し音がよく伸びていた。

やはり最後のピサロはラフマニノフ3番で、その一位はゆるぎないものとなり何度もアンコールが続いた。

いろいろなハプニング

かくして16日間の英国滞在は終わった。次から次へと新しい刺激の楽しさの代償として、私の神経はいつも硬直して睡眠は浅く短かった。その間コンクールとは関係なくいろいろハプニングがあった。

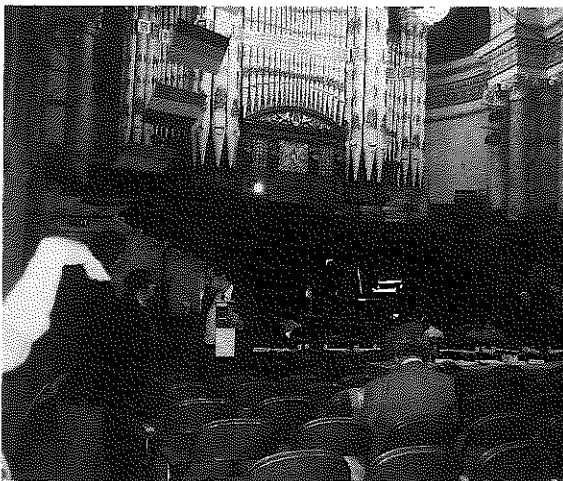
リーズ滞在の折、夜入浴中ホテルの非常ベルが鳴りわたり、泡だらけの身体をタオルで包み、10階から地上まで非常階段を降りたこと。これは幸い8階に起きたボヤだった。

ロンドン/リーズ間三往復中汽車に乗りおくれ、黒人駅員の親切さに思わず握手を交し、チップをはずんだこと。

車窓から眺める羊の群や緑の山園風景。ロンドンのナショナル・ギャラリーで絵画に浸った一日など。数々の出会いに喜び、怒り、深い感動があった。

また日本との通信にファックスを利用したのも特筆したい。

Semi Final Stage
リーズタウンホールの
ステージ



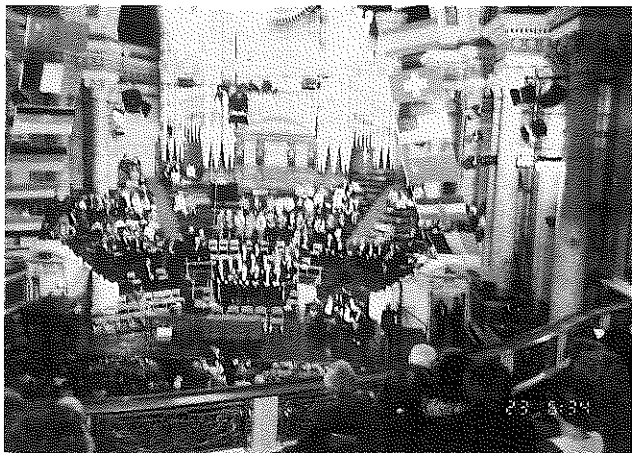
終りに

いずれにせよ、この旅はリーズ・コンクールをめぐる音楽中心の旅であり、私の多年のあこがれであったが、終ってみて、ふと私の頭をよぎるのは、イギリスは今でもビクトリア朝以来の階層と、背の髓までしみこんだプライドを持ちつづけているのではないだろうか。さらには音楽は教養であって、芸術としての音楽、心を弾ませるような芸術的雰囲気を感じる心が稀薄ではないだろうか、との疑問である。私のこの印象が間違っていれば幸いである。

なお、ここに附記したいのは、日本で一緒に勉強した西田淳子さんが、ロンドン・ロイヤル・アカデミーに入ったばかりであったが、何かと行動を共にして予選を聞き、京都を思わせる古都ヨークへの小旅行をしたこと。

また同じくバートベン・コンクールを共にしたウィーンで勉強中の和泉智子さんが、空路2時間半をかけてリーズを訪れ、再び共に異国でのコンクールを聞いたことは、私には思いがけない喜びであった。

昨今外国への留学生が多いとはいえ、私の一人旅で体験したような、さまざまのストレスを乗り越える若人の並々ならぬ勇気と行動力には、敬意を表さずにはいられない。本当に若人の行方に幸あれと祈り、またよい意味での我々の今後の原動力になって頂きたいと思うこと切である。



Final 受賞式を
待つステージ
写真撮影が
なかなか許されない